

# 高市挽歌試論

松原博一

1

日本書紀の記載によれば、高市皇子は、壬申の乱の決定的な段階である瀬田における会戦には姿を見せていないし、また直接指揮すら取っていないことになっている。それにもかかわらず万葉集中の人麿挽歌中最大の構成をもっている巻二・一九九番歌において、あたかも高市皇子がこの会戦を指揮したかの如き印象を与える叙述をなしているのについては、さまざまな疑問を抱かせる。書紀の編纂者が事実を曲げたのか、人麿がありもしないことを歌にしたのか、いったい何れが正しいのか、これについては吉永登博士も史実と人麿作品との内容に喰いちがいがあることを指摘せられ「人麿評価の問題はなかなか困難というべきであろう」と、人麿評価に一つの疑問を投げかけておられる。このことは歴史的事実とは何かということと共に文学的事実とは何かという基本的な問いにもつながることと思われるのでこれに対し、私の所見をのべ、あわせて壬申の乱が高市挽歌にいかにかかわっているかを考察し、この人麿挽歌が果して文学の名に価するか否かについて考えてみたいと思う。

2

この長歌における問題の存する箇所をあげると、まず乱の序曲とみられるものが、「……やすみしし わご大君のきこしめす 背面の国の 真木立つ 不破山越えて 高麗剣 和甕が原の 行宮に 天降り座して 天の下 治め給ひ一に云ふ、掃ひ給ひて 食す国を 定めたまふと 鶏が鳴く 吾妻の国の 御軍士を 召し給ひて ちはやぶる 人を和せと

服従はぬ 国を治めと辨へと云ふ 皇子ながら 任せ給へば 大御身に 太刀取り帯ばし 大御手に 弓取り持たし 御軍士を あどもひたまひ」という二十五句を数え、それに直接する「斎ふる鼓の音は 雷の 声と聞くまで 吹き響せる 小角の音も……」から「……日の目も見せず 常闇に 覆ひ給ひて」までの五十句が、いわゆる壬申の乱を精細に叙した部分にあたる。

全体の内容がやや複雑であるが、山田孝雄博士の「講義」や高木市之助博士の「万葉集大成・総記篇」中の「万葉集の歴史的地盤」および西郷信綱氏の「万葉私記」等を参考にして要約すると左ようになる。

イ、冒頭詞（天武即位から崩まで） 一二句

ロ、壬申の乱の叙述七五句  
a 乱の序曲二五句  
b 乱の叙述五〇句

一三六句

ハ、高市皇子殯宮の模様四九句

a 乱後皇子の奏政一一句  
b 皇子の薨と殯宮での宮人の歎き三八句

(二) 抒情的部分 一三句 作者の感慨で結ぶ 一三句

死者の生前の事績を叙し、残された者の悲情をのべる形は挽歌の慣例であるが、右の構成をみると悲情をのべる部分が圧倒的に尠なく、叙事的部分が九割に及びしかも壬申の乱の叙述が全体の半ば以上を占めているところに、異常な独自性がある。ところがこれとまったく同類の挽歌である「日並皇子尊の殯の宮の時（持統三年四月）——」（卷二・一六七）のそれは、全句数六五句の内三六句が神話にはじまる叙事的部分で、後半の二九句が抒情的叙事として殯宮における宮人達の途方にくれる哀感をのべて終わっており、高市皇子の挽歌におけるような事績を叙する部分は皆無といってよい。日並皇子にはさしたる事績がなかったといえはそれまでであるが、実は形式的、儀礼的挽歌であるといっても、おのずからその構想において自由な面があり、特に高市挽歌の如きは、そのような儀礼を越えて、あるい

はそこから解放された所で、人麿は全力をつくしてうたったものと考えるべきであろう。

高木博士は「——人は王申の乱なしにこの挽歌を持つことができなかった。もつと言へば此の歌を理解する為には作者人麿が必要であると同時に、王申の乱が必要であり、又人が王申の乱という歴史的事実を理解し得る程度は少くとも此の歌を理解し得る程度を測る一つの尺度でなくてはならない。」さらに又「この事は逆に一つの歴史として王申の乱を知らうとする人々（たとへば歴史学者のやうな）にとつては本歌を感知する程度が乱を知る程度を測る一つの尺度と見なす事も出来るといふのと全く同じ事である」といわれている。<sup>(2)</sup>ところが吉永博士によれば、この長歌において史実を計る尺度と文学を計る尺度とが喰いちがっているといわれるのである。この喰いちがいについて博士の指摘を紹介しておきたい。

書紀の天武紀上巻に「天武元年七月二十二日男依等瀬田に到る。時に大友皇子及群臣等、共に橋の西に営りて、大きに陣を成せり。其の後見えず。」とあつて、男依等すなわち村国連男依（美濃国各務郡の豪族）の名が見えるのみで、高市皇子の名は見えない。「男依等」の中に皇子を含めることは身分関係からいっても無理である。「あるいは後方にあつて指揮していたと考えることはできない」と吉永博士はいわれる。この二十二日の瀬田の会戦の直前には「七月十三日男依等、安河の浜に戦ひて大きに破りつ。則ち社戸臣大口・土師連千嶋を獲たり。十七日栗太の軍を討ちて追ふ。」とあつて、やはり「男依等」とのみある。七月九日の条に「男依等、近江の将秦友足（他に見えず）を鳥籠山に討ちて斬りつ。」七月七日には「男依等、近江の軍と、息長の横河に戦ひて破りつ。其の将境部連葉を斬りつ。」とあつて、依然として「男依等」以外の人物はでてこない。かくして結局発遣の記事にたどりつくことになる。秋七月の庚寅の朔辛卯（二日）に「天皇、紀臣阿閉麻呂・多臣品治三輪君子首・置治連克を遣して数万の衆を率て、伊勢の大山より、越えて倭に向はしむ。且、村国連男依・書首根麻呂・和部臣君手・胆香瓦臣安倍を遣して、数万の衆を率て、不破より出て、直に近江に入らしむ。」とある。天武天皇の命によって近江に向かった部将たちは村国連男依外四人で、これが男依等の「等」にあたる。依然として高市皇子の名は見えない。「ここに至つてはもはや高市皇子の瀬田参戦を確かめる資料は日本書紀に関する限り認められない。」<sup>(4)</sup>と吉永博士は駄目を押される。

七月二十六日の条に「將軍等、不破山に向つ。因りて大友皇子の頭を捧げて、當の前に献りぬ。」とあるが、二十一日に山前で自殺された大友皇子の頭は、將軍等によつて野上の行宮に、全軍の統監として動かなかった大海人皇子の前にさしだされているのであるから、高市皇子の参戦はいよいよ影が薄くなっていることを指摘されているのはもつともな御意見であるといえる。

このように、日本書紀によると、高市皇子は直接参戦せず、また直接指揮すらとっていないのになつたのに「高市皇子の死を悼む挽歌に、半ばを占むる会戦の叙述は穩当を欠く。考え方によるとこれは死んだ皇子に對する大きな侮辱さえある」と人麿を難詰されている。「もとより人麿の表現力のたくましさ、そうした実感のないものをかなり生き生きとした描写にまで高めてはおつても結局は虚構なのである。」とも断定される。なるほど書紀をひもどき、吉永博士の指摘されている戦鬪の推移に関する叙述は、その限りにおいては正しい。だがしかし、博士が軽く指摘されている箇所に、むしろ博士の疑問を覆すに足る叙述があると思う。その点を幾つか挙げて、人麿がこの史書から何を得ているかを明らかにしてみたい。

六月二十六日の条に「天皇、雄依が務しきことを美めて、既に郡家に到りて、先づ高市皇子を不破に遣して、軍事を監しむ。」とある。また、六月二十七日の条に「高市皇子、使を桑名郡家に遣して奏して言さく、「御所に速り居りては、政を行むに便もあらず。近き処に御すべし」とまうす。即日、天皇、皇后を留めたまひて、不破に入りたまふ。」とあり、高市皇子の進言を直ちに容れているところを見ると、天武は皇子を重んじているということが解る。のみならず開戦後間もなく、天武はつくづく述懐し、左のように皇子に語りかけている。(やや長文なので要約し意訳させて戴く)

「——近江朝には、左右大臣や智謀の軍師が沢山いて大いにはかりごとを議することができる。自分には相談する人がいない。唯幼少の子達があるだけである。」と天武が慨歎されると、高市皇子が腕をたくしあげ、劍を案じて申し上げた。「近江方の群臣は多いかも知れないが、どうして父天武の靈威にさかろうことができようか。父上は孤独を歎かれるが私という臣がいます。神祇の御加護にすがり、天皇の命をうけ、諸將をひきい、敵を討ち平らげてみせましょう。どうして敵が防ぐことができましょう。」と毅然として言い放った。そこで天皇はその勇武をほめ、皇子の手

を取り背をなで、「自重して、ぬかるでない。」といい、皇子に鞍馬くらまを賜うて、一切の軍事を授けることにした。」とある。こうして皇子は和曠に還つたが翌々二十九日には、天武も和曠を訪れ、皇子に命じ、軍衆に号令させ、再び野上に引きかえしたとある。

以上の叙述をみるに、父天武がいかに皇子に信頼を置いていたか、あるいは皇子が父天武に対し、いかに敬愛の誠を献げていたかを証するに十分な会話と描写をなしていることを示すもので、天武紀の中でもいちじるしく異彩を放つて印象に残るところである。

臣下の将として戦い前半の主導権を握つて活躍しているのは大伴吹負であるし、後半においては村国連男依であることは明らかである。

秋七月二日の時の戦いにも、一は倭へ、一は近江へと兵を二分する重大な際に、前者は紀臣阿閉麻呂のほかの武將に、後者は村国連男依ほかの武將に、天皇みずから発向の命令を下しているように書いてあつて高市皇子の名はみえない。このことについて吉永博士は「七月二日の命令は重大であつた。主力を大和と近江とに割くという両面策戦は、近江勢が優勢を伝えられているだけに十九才の高市皇子の独断で決すべき問題ではなかつたようである。」<sup>(7)</sup>といわれている。まさにそのとおりでであると思う。その限りにおいては吉永博士の説に賛成せざるをえない。

しかし思うに、書紀の天武紀の壬申の乱の顛末を書いた上巻を通読し、強く印象に残るのはやはりかなり詳細に天武と皇子との対話を描写したさきの部分である。そこでは天武と高市皇子とが心を一にして近江の軍と対決する意欲が十分に看取される。天武の気持ちはそのままに皇子の気持ちであり、皇子の気持ちは天武の気持ちでもあるという肉身の一体感が痛いほど読む者の心を圧する。近江の軍の如く多年練磨の智謀の軍師はいない。孤独な不安の只中で天武の心を打つたのは、皇子の純真な決意である。「……天皇独りのみましますと雖も、臣高市、神祇の靈に頼り、天皇の命を請けて、諸將を引率て征討たむ。」というひたむきな情念こそ、天武にとっては百万の味方であつたといえよう。「……鞍馬くらまを賜ひて、悉に軍事を授けたまふ。」という天武の行為は、軍事を一切まかせるといふ事実を越えて、皇子に強い信頼を置いた行為であつたと解されるのである。

このように考える時、天武が直接号令したとか、高市の名は出ていないとかいう記録上の事実の有無はさして問題

にならなくなるし、そういうことをあげつらうことは無意味とはいえないが、尠くとも問題の核心を外したところに力点を置くことになる。皇子はその時どこにいたのであるうかと吉永博士は自ら反問され「……大和へでかけたのでなく、また近江へ向かったのではないと考える。おそらく和曠かもしくば野上の天皇の下にあって、刻々集まる情報に耳を傾けていたものと考えている。」といわれる。それでよいと思う。これをとらえ、和曠か野上か何れにいたかを明らかにせねば史実に忠実でないとすの論があるとすれば、いささかトリビアルズムに墮しはしないか。かりに和曠でも野上でもなく、その時皇子がどこにいようが、乱の終わるまでは皇子は父天武と共に、全力を傾けて近江軍と戦い続けていたことは毫末微塵動くまい。雅澄はこの瀬田の会戦の時「皇子は何処におはしましけるとも書紀には見えねど、此の歌にかくあれば証明なり」(古義二卷二九六頁)とずばり断じている。もちろん私とは次元のちがう解釈であるとしても一つの見識であると思う。

八月二十五日の条に「高市皇子に命じて、近江の群まへみみたち臣あやまの犯かたちつ状のを宣らしめたまふ。」とある。軍の指揮権をゆだねられたさきの事実と乱の後仕末を命じている事実とは、まさに彼此対応しているといえる。この二つの記録があれば、天武は皇子に軍を託したという意義が成立するのである。尊貴の身をもつていちいち前戦にお立ちになることはなかったし、乱の規模の大きさからいっても不可能であろう。さらには、武将とならんで第一戦に出られること自体指揮者のとるべき態度ではあるまい。前線にあらうとなかろうと、全軍を統監する天武の意志と、皇子の指揮権は形影あいまって全武将全兵士に、絶対至上の命令となって彼らの肺肝を貫いていたといわねばならない。人麿は枝葉末節の記録を読んでいるのでなく、史的眞実を読みとっていたと思えるのである。この史的眞実と呼応したところにこの長大な構成をもつ挽歌が創造される要因があったといえよう。

### 3

高市挽歌の構成を分析した叙事的部分における(一)のロ、の終りからハ、のはじめにかかる歌詞中、主格についての問題点があることに触れておきたい。

「神風(1)にい吹き惑はし天雲を日の目も見せず常闇に覆ひ給ひて定めてし瑞穂の国を神ながら太敷きましてやすみし(4)

し吾が大君の天の下申し給へば万世に然しもあらむと「に云ふ、か  
くもあらむと」木綿花の榮ゆる時に……」

右の歌詞中(1)(2)(3)(4)の主格について、従来諸説が紛糾し結着がつかぬことは人の知るところである。それらの解釈の揺れについて橋本達雄氏は詳細に紹介をされ主格に添って文脈を整理された点を左の如く図示されている。

天照大神——天照大神

天武天皇

高市皇子

高市皇子

即ち(1)天照大神が先ず主格として登場し(2)「定めてし」に至って天照・天武が重層し、ついで(3)「太敷きまして」では天武と高市の映像が重なり(4)「やすみしし吾が大君の天の下申し給へば……」から主格は高市に一本化し、後段の叙述に入るといっているのである。なるほど主格が重なっているとすれば主格を一本に絞ろうとする決め手が出ないのは当然であって、注釈の場合に際し各学者が戸惑うのも無理のないことといえる。

乱の序曲つまり(→)の口、の a にあたる部分の中に、天武が「真木立つ不破山越えて、高麗劔和麿が原の行宮に天降り座して」の箇所は、書紀によれば、天武が美濃へ入ったのは伊勢(桑名)からであるから不破山など越えていないのであって、また天武の美濃における行宮も和麿でなく野上であったことになっている。この喰いちがいのため「注釈」も「万葉考」も苦しい解釈を施している。近江から脱け不破山(今不破山という名は残っていない。多分岐阜の不破郡と滋賀坂田郡との境の山あたりか)を越え天武の軍に合流したのは高市皇子であり、和麿に布陣し近江軍を迎撃したのは高市である。書紀はそう誌している。これは人麿の歌詞と書紀との間にある明白な喰いちがいである。しかしこの喰いちがいは人麿の不用意に基づく誤りではないと橋本氏はいわれる。人麿が歌の上で天武をして越えもしない不破山を越えしめたり、野上にでなく和麿に行宮をあらしめたりする一見史実に反する誤りとも歪曲とも思える歌い方をするのは計算ずみの上での表現であるとみておられるのである。このように人麿が何故に書紀の記載に外れた表現をしたかといえ「文脈上は天武でありながら、事実は高市の行動に即させ、ここに二人の映像を重層せしめようとした意図」があったと断案される。

桜井満氏は「日並・高市の父帝が天武であり、人麻呂の生きた時代を開拓した天皇であるから、人麻呂の歌におの

づから神話的発想がとられ、天武も日並も高市も日の皇子としてひと続きの人格として歌いあげられたに違いない。特に高市挽歌における主格の動揺はわれわれの近代的な感覚が問題にすることであつて、万葉びとはごく自然な表現であつた<sup>(14)</sup>といわれる。しかし橋本氏によれば「ごく自然な表現」などでなく、この背景に政治的動機のあることを指摘せられ、古事記の神話体系の頂上に位置する天照大神がこの歌の起点をなしていることを重視し、持統期において天武のなつていた大きな政治的役割を十分念頭におきつつ人麿はこれらの歌を作つたといわれる。さらにこの挽歌は、莊重に抑揚をつけて朗誦されたであろうから、口誦性における効果の上から、かかる「重層的技法をそれらも甚だ巧妙な方法を人麿をしてとらしめた。」と指摘され、日並皇子殯宮之時、高市皇子尊城上殯宮之時の挽歌二首とも、解釈上不安定な上述の箇所が多くの学者を悩ませてきた訳であるが、その不安定は人麿が意識的<sup>(15)</sup>重層を企だてていることに對する理解不足から発した動揺であることを明らかにされている。ややもすれば微視的にのみ語脈を追跡する注釈学者の盲点を衝いた卓見である。

私はさきに、壬申の乱には高市皇子は参戦していないといわれる吉永博士の見解をとりあげ、史的記録と史的真实との相違についてのべたが、橋本氏の見解も、史実をそのままに表現しなかつたのは人麿の文学的技巧に基づくのであつて、この技巧に媒介されることによつて史的真实を打ち出したのであると解釈されるのである。記録にみられる現実をそのまま表現に写すのが歌ではない。言語芸術の一つのジャンルである歌謡に表現するために、作家は史実を組み立て直すことによつて表現的真实に置き替える能力を發揮する自由を持つのである。随つてこのばあいにも、歴史的素材(天照大神という神話上の神を含め)を天武・高市のイメージに重ねる技巧を用い表現的真实にまでたかめることを意図し、そのような作業の結果、表現上の真実を示した歌であるといふことができる。しかもそこにみられる重層的技巧は、縦ぎまの神話と抱合したものであつて、いわば神話的発想がこの技巧を支えているとみられるのである。随つてここには、神話的発想と文藝的発想との重層が自然の間に果されているのである。神話的要素と文藝的要素とのいわば原始的思考と芸術的思考との癒着がみられ、そこに人麿文学の文学史的位置を物語る独自の性格を指摘することができる。

人麿はどのような立場ないしどのような身分において、これらの挽歌を作つたのであろうか。かれが宮廷詩人であ



ったという呼称の文献的根拠はない。当時の職員令にも神祇官の中にも治部省雅楽寮の組織にも見えないので、吉永博士は宮廷詩人を職業と律するのは幻想に過ぎないとされ、この呼称の開祖である折口信夫博士の無責任を難詰しておられる。<sup>12)</sup> 人麿は日並や高市に仕えた舍人であったという真淵以来の説があるが、これは二〇一番の短歌にもある通り「ゆくへも知らにとねりはまどふ」の詞句にその根拠をおいたものである。この句は三人称ともとれるのであるが、皇子を「わがおほきみ」ないし「きみ」と呼ぶに対応して自己を「舍人」あるいは「舍人等一同」といった風に舍人の一員として自己を意識している用法ととつてもよい。そこに歴史的地盤としての人麿の主體的意識が確立されているとみればみることもできよう。ところが人麿舍人説に対し西郷信綱氏は「歴史家の研究によれば、舍人は後進地帯である東国の豪族・国造の出身であるらしいので人麿が舍人であったとはいいいにくい。」<sup>13)</sup>と疑問をはさみ、歌に拠りかかった説は「……あまりにも直接性の天国であり、経験主義的解釈法だ。」ときめつけ、この歌は皇子の身辺に寄り添っていた舍人たちの場に、詩人としての自己をアイデンティファイしているのであって、前芸術形式ともいうべき「誅」の伝統の苗床に根を下した公共的歌作で、私的歌作でない<sup>14)</sup>と断じられる。つまり人麿は舍人ではないのであるが、職業詩人的構成と技法とをもっている点で、この歌は特に個的な作とは質的にちがうということをいいたかったらしい。ともかく人麿は宮廷詩人ではなく舍人でもないが、舍人達の場に詩人としての自己を擬して挽歌をつくつたものであるとされている。

二〇一番の短歌と、舍人が終身の任であるとしていた状況——状況というのは、草壁皇子薨去の時の舍人達の挽歌二十三首の内容がそれを最もよく示している（一七一番——一九二番）という点から判断し、神田秀夫教授は、人麿が舍人であったことは明白であるとして、西郷氏と意見を異にする。神田教授は舍人とは何かの実体について、発生的に皇室の諸王の在り方と密接に関連せしめてその本質と性格とを明らかにされている。人麿は持統天皇の知遇を得て実質的な活動をさせて貰ったことに深い感動を抱いていたに違いない。そして草壁皇子の薨後、高市皇子は太政大臣に任命され持統を助けて才腕をふるい大いに人望をあつめたのであるが、人麿は宮廷に自由に入出して、当時の宮廷における中心人物と目される高市皇子に近侍し、信頼をうけることに矜りを持つていたものと推察される。この事実は、人麿の内部に五世紀以来の舍人精神をよみがえらす有力な契機をなしたにちがいない。のみならず「人

麻呂をして、自分も亦皇子たちにとって必要な人間なんだという愛情のめざめを起し、ますます献身的ならしめ右の傾向に拍車をかけたであらう。かくの如きものが、人麻呂の、舍人としての、皇室との関係であったと考へられる。<sup>14)</sup>と神田教授は説いておられる。

人麿「舍人」説を人麿に関する唯一の文献たる万葉集からストレートに帰納することは困難である。人麿の宮廷関係歌において、持統称制二・三年の近江荒都の歌(巻一・二九〇三二)から六九七—文武即位後朱鳥十二年紀伊行幸時結松の歌(巻二・一四六)までの間に集中する歌群の年代をみると、人麿は天武・持統政権とくに持統女帝に密着していたといえる。天武・持統の白鳳政治の展開に縁の深かった草壁と高市の両皇子に限っていちじるしく感激のあらわれた重厚痛切な挽歌を残したのは、天武持統体制における痛恨事がそのまま人麿の痛恨事であったと想像されるのである。何れにしても宮廷の舍人集団とは舍人(天皇皇后皇太子の下級側近)張内(親王の側近)資人(京官貴族の側近)事力(地方官の側近)の四種に区別され、令制確立以前には、この区別はさほど厳密ではなかったらしいし、人麿は資人以上のどれかの身分で持統女帝に出仕したという線までしか追ひつめることはできない。<sup>15)</sup>

ところが吉田義孝氏は高市挽歌の表現に即して人麿の身分を追求されている。まずこの長歌の(一)のハ、のホにあたる歌詞に「つかはしし御門の人も……」とある。この三人称的発想は、作者の視点が舍人集団の外にあることを示すもので、それにつづく舍人たちの行動を「白妙の麻衣著……」云々と客観描写の手法をもって描いているのは決して偶然ではないといわれる。その意味で「つかはしし御門の人」を描く部分には、人麿の舍人としての積極的自己主張がないとみられるのである。しかし行動的な舍人の悲歎と人麿の哀傷とがわからなく混濁している実感は否定しえないので、舍人等をも内に抱きこんだもう一つ高い次元—それは「大舍人」としての官僚的立場でこの挽歌を歌っていると解しておられる。<sup>16)</sup>かくの如き公式儀礼歌の制作について、かつて高木博士がこの歌をその著「古文芸の論」の中で「人麿という個の作家にも属していないし、かといって宮廷歌人的な職業意識にも属していない。」きわめて独特なものであると規定されるのをあいまいな規定であるとなし、のちの大宝の制で治部省として制度化してゆく典礼に関する部局の一部の職を、制度の固定化する以前の天武朝におき、それぞれ大舍人という身分で分掌していたのではないかと推定されている。さらに、日並挽歌では「わが大王皇子の命の天の下知らしめしせば春花の貴からむ」という

ように草壁の皇位継承のことを明白にうち出す表現になっているが、高市挽歌では「やすみしわが大君の天の下申し給へば万世に然しもあらむ」と、太政大臣として天皇を補佐していくことの期待は歌われていても、高市の皇位継承には全く触れられていないことを指摘し、それらの理由によって、吉田氏は、官僚的立場で歌われたすぐれて政治的な発想に根ざす殯宮儀礼歌にはかならないと断じられるのである。<sup>17)</sup>

西郷氏は、かつて人麿が自らを舍人に擬して歌ったといわれたが、いかなる階級いかなる地点に立って人麿が自らを舍人に擬したのが不明である。のみならず自らを舍人の立場にアンデンテイファイしたというような立場からは、高市挽歌に沸騰する情念の強さが説明されないのである。神田氏や橋本氏や伊藤氏の人麿トネリ説は、古代王室の性格と詳細なその展開により肯定できる所論である。高木博士の如くその制作の契機について、人麿という個にも属さず、かといって宮廷歌人の職業意識にも属さないという微妙な解釈も、作品の特異な性格の上から判断できる所論である。確かにこの作品は公式的儀礼的背骨を重々しく背負っていないながら、その枠の中にはめこむことのできない自由に奔流する何ものかがあると思られるのである。表現の歌詞に即した解釈に基づいて吉田氏は、天武・持統政権に密着する官僚として人麿大舍人説を主張される。たしかにこれは慧敏な視点に基づく見解である。しかしかような政治的立場から裁断される態度からは、その何ものかに対する解釈がでて来ないのである。このようにみれば、この挽歌はまことに複雑な内容と要素とに富むもので性急な評価は許されないのであって、評価にあたっては十分に慎重を期さねばならないと思うのである。

いうまでもなく高市皇子の薨去に際する挽歌であるから、高市のことを叙べている筈であるが仔細にみていくと、乱の叙述は高市でなく天武のこととして叙べられているのである。天武が、まつろはぬ国を治めよと軍の指揮権を皇子にお任せになったので皇子は、大御身に大刀をはき、御手に弓を持たれて、兵を率ひ賜ひとあるから、戦闘の状況は高市が闘っているという予想を文脈の上でもつのである。だが乱の叙述的描述ないし描写的叙述を読み進むと一向に具体的でない。だいいち、高市の薨去を主題に置きながら、冒頭のいかめしい言い出し、「かけまくも、ゆゆしきか

も……」を含める以下十二句は、わが王即ち天武にかかつてくる壮重な長い序詞であつて、その天武の命を受けて皇子は大刀をはいてというふうに初句からはじまつて三十五句目によりやく高市が登場するのである。とたんに「齊ふる鼓の音は」で戦闘の叙述に移るのであるが、その叙述たるや主客が埋没して誰が闘っているか分らないのである。乱の直接の叙述に五〇句を投入したあたりは忽然として天照大神と天武が現われ(一)のハ、に至つて「天の下申し賜へば」と高市が前面に姿をみせ、その後は常套的な哭をパターンとするいわゆる女性的哀傷歌の形に移つてゐるのである。

生前の功業をのべる誄の原型を踏まえた(イ、ロ、の叙述の主奏の対象はどうみても天武であり、高市はその伴奏者としてちらりと現われているとしか思えぬのである。高市に手柄がないということではもちろんないのであるが、天武あつての高市であるというふうな重点はもつぱら天武にあるということは、おおうべくもない人麿の表現的意図である。かように考えると天武が野上行宮を置いて、高市のいる陣地が和麿であつたのに、人麿は天武を和麿が原の行宮に「天降り」させているという文脈が理解できるのである。高市の行動はことごとく天武の命であると共に、天武の行動でもあつたゆゑんであらう。

人麿の鋭敏な語感と柔軟な触觉とのからみあいがかうねりを打ちながら進行するこの長歌は、全体として感覺神經の利いた表現に終始し、まさに茂吉のいう連続声調体を成してゐるのであるが、動乱の状況は内実的にいつて叙事になつてゐない。戦闘の叙事であるから、ある戦闘集団とある戦闘集団との対決が予測されねばならないのであるが、その内容がほとんど認められない。ただわずかに「立ち向かひしも」の一語があるのでどうやら相手のあることが漠然とわかるだけである。もつぱら誰かが勇ましく闘つてゐるのみを描写してゐるだけで、一人相撲をみているようなものである。しかしつとに井上通泰博士や林古溪氏等が指摘する如く中国の戦国策や文選などの表現に負う修辭ではあるが、人麿の情熱と技巧の裏づけがあり、単なる模倣には終つてゐないといえる。日本にいましめない虎を吼えしめたり、幡の靡きを野火に譬えたり、弓弭の音を飄風といたり、箭の繁きを大雪の霏々たる乱れになぞらえたりする表現はさすがに手に入ったものである。しかしそこにみられるものは戦闘一般の叙述で天武や高市や武將の奮戦といった具体的イメージは何もない。高市でも天武でもよい。あるいは瀬田の会戦でなくてはならないという特殊性もこの戦闘の叙述には一向に現われてゐない。読後感がまったく抽象的概念的で一見動であるかの如く見えて実

は絵画的である。こういえばいかにも感動を喪失し空洞化されたものに墮していることになるが、それにもかかわらず一つの力感に漲り溢れている実感は否定できない。いったいこの矛盾に充ちた実感はいかなる論理で説明されるべきであらうか。

人麿のこのばあいにおける表現の意欲は、叙事の内容や闘いの性格を追求しようとしているのでなく天武の荘大な精氣と勇武とを「黄金の幻想」として描きあげたかったのではなかったか。それを意図する表現そのものに全力的に傾注する人麿の意欲が蒼白い炎のように燃えあがり、例えそれが抽象的概念的であつたとしてもそこにある激しさをもっていることに打たれるのである。

(一)イ、ロ、における人麿は白鳳の「黄金」を天武にみてその精氣を打ち樹てつかまんとして全身的に身悶えしているのである。いわば勇壯な戦鬪の幻影の中に人麿の憧憬と悲願とを封じ込めようとしているのである。(一)イ、ロ、はこのような意味における天武に関する人麿的造型による諷刺を踏まえた発想である。(一)のハ、と(二)はまがうかたなく高市の薨去を傷む哭なみの歌である。随つて前半と後半とは焦点を異にしたものといえる。しかしこのように異質であるにもかかわらず、それがそのままに不思議な力関係のかみ合いにおいて統一されているのは何によるのであろうか。思うに人麿が(一)イ、ロ、において打ち樹て描こうとした「黄金の幻想」が(一)ハ、と(二)における高市の薨去によって否定され崩壊せんとする不安の情に支えられているからであつて、この不安の深さが深ければ深いほど前半、特に乱の描写にみる幻想的表現がかえつて妖しい光彩を帯びてくる關係に立っているといえるのである。逆に(一)イ、ロ、に傾倒する人麿の心熱の強さ高さはそのまま後半における哀傷感を深めることにもなるという關係によつて構成された長歌であるということが出来る。

吉永博士は、素朴な次元でこの歌に対する懷疑を提示されたのであるが、それは橋本氏の理解で解決できると思うのである。だがその解決の後にでてくる根源的な疑問に対しどう答えるべきかは困難を極める作業である。吉田義孝氏はいちじるしくそこに政治的契機があるとされ、この挽歌にあつては天武も高市も具体的人間性を欠くのみならず乱の叙述も躍動がないとみておられる。乱後における天武・持統政権下の呪縛は否定しようにも否定できないことはいうまでもないが、<sup>108</sup>人麿の高市挽歌をそういう政治的面からのみ理解することはなお片手落ちな見解であると考え

のである。形式的には宮廷儀礼歌であることに規制され、外発的には政治的呪縛につかまれた歌であるに相違ないが、それでいながら人麿の内面にうづく生命は、混沌として渦を捲いているのである。人麿の描く「黄金の幻想」に襲いかかる何ものかとの闘いがこの歌の文脈を越えてあふれているのである。人麿の根底には人麿の抛つて立つ地盤の崩壊に対する不安が、人麿の内部に深いかげり、を投げかけているのではないか。この暗部の深さこそ、この挽歌を文学的たらしめている要因でないかと思うのである。もしこの挽歌が政治的に規制されたものとするならば、人麿の存在を肯定する政治と人麿の存在を否定する情況との間に蕩揺する人麿の大いなる不安を契機とした歌であり、さらにはむしろその不安を吹き掃おうとして全力を尽した抵抗の意欲がこの長歌を成さしめたといえる。

大化の改新以来、律令国家の完成をめざす進歩的官僚の勢力と、大化の前代に強い郷愁を抱く旧氏族や舍人層の流れの拮抗するなかで、人麿の所属と地盤とを継承する筈であった皇子たちの相つぐ薨去は、天武Ⅱ持統ラインの挫折のみならず、人麿の挫折を予感せしめる不安の胚胎を招くことになる。かれ自身をつつむ時代の不安な情念にゆさぶられつつこの長歌を造型したものであって「黄金の幻想」の永生を渴望する人麿の捻転する激情により創造された白鳳的神話をこの挽歌に仮託したのだと思う。そこには挽歌という儀礼歌の範型を打ち破る、より高くより自由な創造心の奔騰があり、その奔騰の背後には人麿の個とかトネリとかという身分を越えた社会的構想力の論理が大きく動いているといつてよい。(四五・一・二〇日)

注 (1)(3)(4)(5)(6)(7)(8)は全て吉永登「万葉文学と歴史のあいだ」九・高市皇子と瀬田会戦・一三九——一四五頁より引用。(創元社)

(9) 高木市之助「万葉集大成」総記篇・万葉集の歴史的地盤：九頁(平凡社)

(10) 橋本達雄「人麿の意図」——日並・高市両挽歌の文脈について(上代文学。昭四二年第二十二号)

(11) 桜井満「高市皇子尊蹟宮挽歌」(国学院大学雑誌第六十八巻)

(12) (1)の十・宮廷歌人の存在を疑う：一一一頁

(13) 西郷信綱「柿本人麿」三・人麿の位置：二二頁(岩波講座・日本文学史第一巻・古代)

(14) 神田秀夫「人麻呂歌集と人麻呂伝」七・皇室と舍人(塙書房)

(15) 伊藤博「トネリ文学」歌人と後宮——(日本文学季刊)一年一月号

(16) 吉田義孝「高市挽歌論」——高木氏の所論に関連して——(万葉・昭三九年四月一五号)

(17) 右同

(18) この事実是人麿にとり決して呪縛でも桎梏でもない。人麿の内部にあつては未だ自己というものが未分化の状態にあつたと思う。